

令和元年度 瀬谷区地域福祉保健計画 全域計画推進懇談会 議事要旨

日時	令和元年6月20日(木) 午後2時から午後4時30分
場所	二ツ橋地域ケアプラザ 多目的ホール
出席者	出席委員 18名中14名
	<p>1. 開会あいさつ(森区長)</p> <p>2. 新委員紹介</p> <p>3. 意見交換</p> <p>(1) 平成28~30年度全域計画振り返り、令和元年度の取組みについて (◇:意見等 ➡:所管課による回答)</p> <p>◇認知症対策については、医療との連携やキャラバンメイトの活動支援など、いろいろと取り組んでいただいている。今後は、認知症予防の取組について、個人や地域への指導・支援がとても大事だと思う。「認知症になったらどうしよう」といった不安のある人が、認知症予防の取組をとおして、希望を持つことのできるよう、一緒に取り組んでいきたいと考えている。</p> <p>県営橋戸原団地に、福祉駐車場を2台分設けたと聞いた。ヘルパーやケアマネジャー、医者などが訪問する際、近くに駐車場がないと路上駐車せざるを得ず、安心して従事できない。市営住宅ではまだ福祉駐車場の動きはない。介護サービス事業者等が安心して従事できるよう、市営住宅でも対応していくことが重要だと思う。</p> <p>◇先日の認知症講演会(平成31年2月16日実施)に多くの区民が参加したと聞いている。家族が認知症になったとき、どう対応すべきか勉強したいのと思う。ぜひ継続して講演会を開催してもらえよう、お願いしたい。</p> <p>◇最近、高齢者の自動車事故が頻発している。事故防止に繋がる一番良い取組は、免許証を返納し、自動車を手放すことだが、本人や家族任せでは、なかなか良い方向には進んでいかないのではないかな。各地域や各団体などでできる良い取組があればと思っている。</p> <p>◇最近の認知症対策に関する国の動向は、認知症になっても住み慣れた地域で暮らしていく「共生」という観点から、認知症予防に重きを置くように変わったように感じる。そういった動きはあるものの、瀬谷区は瀬谷区として、認知症の人への支援をきちんとやっていきたい。</p> <p>キャラバンメイトでは、様々な場で認知症サポーター養成講座を実施している。先日は、消防署職員に向けて、認知症について学習する機会を設け、高齢者疑似体験を行なった。参加した職員からは、「相手の身になって考えることが非常に大事だとわかった」といった感想をもらった。引き続き、認知症サポーターを増やすために、キャラバンメイトとして活動していきたい。</p> <p>➡認知症対策については、区役所でも様々な取組をしている。高齢になり、閉じこもってしまうことで社会性が落ち、さらに認知症が進行してしまうことがある。各地区で、自主的に介護予防の活動が展開できるよう、地域ケアプラザと協力して、元気づくりステーションを立ち上げ、自主化に向けて支援している。また、各自治会町内会でも、高齢者がイベントに参加できるよう、工夫をしている。ほかにも、NPO法人の活動支援など、様々な観点から認知症予防に取り組んでいる。</p> <p>医療連携について。地域ケアプラザの協力医の先生に協力してもらい、認知症ミニ講座を開催し</p>

ている。大きな講演会だけでなく、より身近な場所でも認知症の話が聞けるような方法をとっている。(高齢・障害支援課長)

◇大規模な認知症講演会も必要だが、フェイス・トゥ・フェイスで、その場ですぐに質問できるような、身近な場所で開催する小規模な講演会も必要だと思う。地域ケアプラザの協力医に協力してもらいながら、各地域での講演会を継続して開催していきたい。認知症になった人のケアと認知症予防の両輪が大事だと思っている。

◇先日、多機能型拠点こまちの見学をしたが、素晴らしい施設が瀬谷区にできたことに深く感銘を受けた。今、個別支援級に通う子どもが増えている。放課後デイなども盛んになってきて、多くの人が利用している。様々な障害のある子どもがいて、個別支援級に通う子どもは、養護学校に通うほど重度の障害ではなく、まさに地域で暮らしていく子どもなのだと思う。瀬谷区には、ant mamaのような発達障害のグループもあり、保護者同士、あるいは学校が細やかな対応をしているが、地域も目を向けていく必要があると思う。個別支援級のニーズが増えているということ、地域も理解していく必要がある。

◇引きこもりの人による犯罪に大きな衝撃を受けている。先日、朝日新聞に「親死んだら、僕どうなる…」という見出しの記事が掲載されていて、好んで引きこもっているのではなく、そうせざるを得ない人の複雑な心境が綴られていた。両親が亡くなったあと、残された自分はどうかと不安に感じているように思う。引きこもりが必ずしも犯罪に結びつくわけではないが、そういった人たちを心配に思っている。瀬谷区において、引きこもりの問題がどういう状況にあるのかをお聞きしたい。また、家族に引きこもりの人がいることを周りに相談することはなかなか難しいことのように思う。寄り添いながら相談を受ける体制がさらに必要だと感じている。行政だけでなく、支援団体、サークルなどを育てていかなければならない。

◇第3期計画では、障害分野の取組が各地区で増え、地域の人にも、関心を持っていただいていると感じている。瀬谷区は、横浜市の中でも障害者の割合がとても高い。5～6年前のデータではあるが、身体障害者の割合は18区中2位、知的障害者の割合は18区中1位、精神障害者の割合は18区中3位。

現在、瀬谷区には、養護学校が4校ある。瀬谷区は、20年ほど前、2～3か所しか事業所はなかったが、現在では、日中に活動をする事業所だけでも20か所ある。グループホームも20か所近く増えた。放課後デイサービスも、ここ2～3年の間に増えて、10か所以上になった。しかし、他区に比べると、瀬谷区は事業所の数が少ないといえる。サービスを利用すると、そこで完結してしまいがちだが、当事者は、自分の子どもがどのように成長していくのか、見通しが持ちづらい。サービス自体は増えてきているが、当事者の縦と横の繋がりはまだ弱いと思っている。

最近の報道によって、犯罪をした人に通院歴があると、そのことに注目されがちであるが、通院歴と犯罪はイコールではないということをご理解いただきたい。

精神保健福祉講座を地域向けに実施している。精神障害者の活動の様子など、地域への理解を広げていくための講座もあるので、ぜひご活用いただきたい。

最近では、地域ケアプラザも障害分野に積極的に取り組んでいる。地区社協と地域ケアプラザ、福祉事業所の3者での活動を、今後も継続していきたいと思う。

◇PDCAシートに◎をつけている部分について、なぜ◎にしたのか、所管課の話を伺いたい。

➡引きこもりについて。こども家庭支援課では、こども家庭相談を設けて、電話相談や面談を受けている。また、瀬谷区では平成 29 年度から、他区に先駆けて、区役所での西部ユースプラザの出張相談をしている。相談日は、第 1・第 3 火曜日の午後。平成 30 年 5 月からは、全区で区役所での出張相談が始まった。

西部ユースプラザは、天王町にあるが、引きこもりの人にとっては、遠くて行きにくい。区役所という身近な場所で相談できる体制を整えていくことで、西部ユースプラザには行けなかった人が相談に行けるようになり、関係部署に繋ぐことができる。さらに、地域ケアプラザでも、引きこもりの出張相談として、セミナー及び相談会を開催している。

西部ユースプラザは、令和元年度中に二俣川に移転予定。瀬谷区民にとっては、近くで相談できるようになるので、地域にも宣伝していきたい。みなさんにも周知や、セミナーへの参加をお願いしたい。(こども家庭支援課長)

➡福祉事業所活動支援事業について、◎にした理由。福祉事業所活動支援事業とは、事業所の自主製品の販売によって、障害者本人がやりがいを持つことや賃金を得ること、さらには、障害のない人が障害のある人と接することで、障害理解を深めることを目的とした事業。平成 30 年度・令和元年度には、三ツ境駅・瀬谷駅での販売が 2 回増え、佐川急便での販売も 2 か所になった。今は、薬局でも自主製品を取り扱ってくれるという話が出ている。様々な場面での販売が増えてきたので、◎の評価とした。(高齢・障害支援課長)

◇障害分野の取組が増えたことを嬉しく思う。地域福祉の議論では、一般に、障害者や外国籍の人など、少数者への言及が少ないと言われていて、その指摘は本当だと思う。しかし、その一方で、障害分野にも光が当たり、取組が進んできているという側面があることも確かだと思う。

◇最近では、児童虐待による重篤事例が非常に多く、やるせない気持ちになっている。児童福祉士の人数が足りないなどと言われていて、児童相談所も忙しいのだろうが、警察から連絡が来ても現場に駆けつけることができず、最悪の事態になってしまうことに憤りを感じる。

児童虐待について、事前に情報をキャッチできても、肝心のところが動けないのであれば、それは問題だと思う。こうした事態が起きないように、地域でもネットワークづくりを追究していきたい。瀬谷区でも、子どもの居場所づくりを含め、引き続き、支援に取り組みたい。

◇児童虐待は、瀬谷区でも多い。地域で見守りをしよう、とは言うものの、実際には、地域の中で虐待を見つけることは、相当難しいのではないかと思っている。地域の人に、どうやって対応していったらいいのかを教えてくれれば、そのとおりに動ける。地域はどう見守りをすればいいのか、良い知恵があれば、教えてほしい。

◇地域がどう取り組むのかを考えると、「気づき」が大切なのだと思う。子どもが大声で泣いているなど、異変に気づいたら、勇気を持って通報する。PTAには、同じ子育てをする仲間として寄り添い、困っていることはないか、働きかけをしてほしいと伝えた。

ストレスが原因となって、虐待に至るケースもある。東京都狛江市には、お母さんが困っているときに、有償ボランティアがすぐにお母さんの代わりにしてくれるといった備えがある。瀬谷区でも、同様の事業があると思うが、もっと裾野を広げて、気楽に頼ることができれば、子どもにあたってもらうことも少なくなるのではないかと思う。

◇児童相談所や区役所、関係団体、弁護士等が集まる大々的な協議会は、年に数回しか開けない。

しかし、今助けてあげないといけない家庭や放っておいたら子どもの将来が奪われてしまいかねないような家庭もあって、すぐに連携して対応できるよう、もっと小さな範囲でも動けるようになれば良い。第4期計画に向けて、「既存の地域の集まりに出席するなど、アウトリーチ的な手法を取り入れることを検討」とあり、心強く感じている。

引きこもりについて。小・中学校のあいだは、学校と地域、区役所で不登校などの情報共有ができていたが、中学校を卒業すると地域でも見えなくなってしまう。実際に、高校からの連絡は数年に1回程度と少ない。中学校卒業がひとつの区切りとなって、引きこもりの最初のきっかけになってしまっているのではないかと思う。

◇北部ユースプラザに研修に行ったことがあるが、当事者とその家族は、39歳を超えて、自分が支援の対象ではなくなってしまうことに恐ろしさを感じているように見えた。自主訓練や就労訓練をしてもなかなか上手くいかないときに、どういう支援が必要なのかを考えていた。

瀬谷区で貧困家庭の子どもたちの生活支援や学習支援をしていたときに、虐待ではないかという事案に度々遭遇した。子どもを守るのは第一だが、お母さんやお父さんも苦しんでいるように見えた。子どもだけでなく、親に対しても、北風と太陽でいったら太陽のような支援が必要ではないかと思う。

夜間など、児童相談所の職員がなかなか動けないときでも、NPO法人はフットワーク軽く、すぐに動くことがある。地域に住んでいるので、夜間でも生死に関わる時はすぐに駆けつけることができる。横浜市からの委託内容はあらかじめ決められたものではあるが、現場の人として、もっと能動的に関わることができれば良いと思う。

8050問題について。80歳代の両親の年金を使って、50歳代の子どもが暮らしているという事案に遭遇したことがある。80歳代の母親が亡くなり、遠方の兄弟が見に来ていたが、ご飯に手をつけてないということで相談があった。警察とともに自宅に入ると、50歳代の方は亡くなってしまっていた。何もできなかつたという苦しい思いがある。こういったときにどうしていけばいいのか、この場で相談したい。

◇学校には、福祉の支援を必要としている子どもだけでなく、全ての子どもたちがいるということがとても重要だと考えている。多くの人が心配に思うような家庭・子どもがいる一方で、実際には、いつ、誰が、どういう形で困難に巻き込まれていくかは分からないとも思う。だからこそ、あらゆる子どもが目の前にいる学校として、子どもたちの状況をどうやって把握していくのかを考えている。

虐待に関して、区役所や児童相談所と連携をとることができるようになってきたという実感がある。守秘義務がある中で、必要な情報を共有ができるようになってきたことに意味がある。

ここ5年間くらいを振り返ると、学校には、虐待の通報をすることにどうしても躊躇があったように思う。学校は、子どもたちの保護者と数年間継続してやりとりしなければならないためだ。それでも最近では、「子どもの命が第一」という思いで、通報することに対するハードルが下がってきたことは大きな進歩だ。

今の学校にとって、心配な子どもがいても、その子の家庭にズカズカと入っていくのはやはり難しいところであり、地域と連携しながら、子どもたちを見守っていかないといけない。みなさんにも、地域での見守りを続けてもらえるとありがたいと思っている。

引きこもりについて。不登校の問題は、瀬谷区の中学校にとっても大きな課題だと認識している。しかし、中学校で不登校だったからといって、必ずしも引きこもりになるわけではない。中学校のときは、多くの機関と繋げることができるが、高校入学後に、関係機関と繋げていくことの難しさを感じている。中学校でも、卒業する子どもたちをどこに繋げていくか意識しているが、実際は難しい。中学校の段階で、就労することの意味をどれだけ伝えられるかということが重要。

➡児童相談所と区役所の連携について。平成 28 年に児童福祉法が改正され、区役所も、虐待等の通告機関になった。養育支援台帳において、支援が必要な子どもを把握し、区役所・児童相談所がともに、必要に応じてリアルタイムで閲覧できることになっている。また、進行管理会議を 3 ヶ月に 1 度程度開催し、区役所と児童相談所の双方が、養育支援台帳を使って、子どもの状況やどんな支援をしているかのすり合わせをしている。

地域の人も、どういうときに通告をすればよいのか、気づきのポイントを知っていただくことが必要だと思っている。泣き声が一晩中ずっと続く、異常なほどの怒鳴り声がある、といった異変に気づいて通告に至るケースが多い。30 年度は、自治会町内会、民生委員・児童委員向けに講習会を開き、それをきっかけに、同じ講師が地域にも出向いて講習した、ということが何度もあった。区役所としても、地域向けの研修などを用意していきたい。

子どもの状況やそれぞれの機関がどういった支援をしているのかという情報をすり合わせていく場が必要だと思っている。

児童虐待防止のオレンジリボンキャンペーンについて。民生委員・児童委員の協力のもと、オレンジリボンキャンペーンが実施できることを大変心強く思っている。PDCA シートの訂正をお願いしたい。「C」の中段の 2 (1) オレンジリボンキャンペーンの箇所に、「主任児童員」とあるが、正しくは「主任児童委員」なので資料に訂正をしていただきたい。

瀬谷区は、民生委員・児童委員、地域に加え、学校とも、連携が図れていると肌で感じている。さらに連携を深めつつ、区役所には区役所にしかできないこともあるので、役割分担にも意識しながら、今後も取り組んでいきたいと考えている。(こども家庭支援課長)

➡引きこもりについて。西部ユースプラザは、月 2 回、区役所での出張相談会をやっている。原則 40 歳未満としているが、電話等で問い合わせがあったときは、柔軟に対応している。区役所での出張相談会のメリットとして、相談を受けてすぐに区役所の各課に繋ぐことができる。30 年度からは、地域ケアプラザでも相談会やセミナーが始まり、幅広い年齢の人たちに対応できるようになっている。(こども家庭支援課長)

➡生活支援課では、生活保護の決定といったお金の出る支援とあわせて、生活困窮者自立支援制度として、お金の出ない支援もしている。生活困窮者自立支援制度とは、暮らしの中での様々な困りごとについて、話を伺いながら、一緒に解決を考えるという制度である。相談を受けながら、例えば、仕事の探し方や家計をどうしていくのかなど、どうしたら解決に向かうのか一緒に考えている。こうした相談に対応しているうちに、引きこもりの問題にも気づくことがある。

高校に行っていない、困窮世帯の概ね 15~18 歳を対象に、高校生世代の支援を検討している。高校に行っていない若い世代は、社会的な活動の場が少なく、働くイメージや社会生活に対するイメージが乏しくなってしまうがちである。令和元年度からは、そうした高校生世代が社会参加できるよう、情報提供や講座の開催等、計画を進めている。(生活支援課長)

➡高齢・障害支援課には、障害者支援担当という部署がある。身体障害者、知的障害者、精神障害者に対応している部署だが、障害者手帳を持っていない人に対しても、精神保健福祉相談をしている。40～64歳で、引きこもりの人の中には、精神的疾患のある人もいるように思う。障害者支援担当には医療ソーシャルワーカー（MSW）がいるので相談を受けることができる。場合によっては、嘱託医が相談を受けたり、話を伺ったあと、病院での受診を勧めたりしている。本人からだけでなく、親類からの相談にも応じている。（高齢・障害支援課長）

◇青少年指導員の立場としては、多くの子どもたちに楽しんでもらえるよう、連合会の行事など、様々なイベントの企画等やっている。

➡地域ケアプラザのPDCAシートの説明。「C」の「地域住民関連機関との連携」を◎とした理由。瀬谷区内にある5つの地域ケアプラザの共催事業として、「音の駅コンサート」を開催している。各地域ケアプラザが担当エリア内で「音の駅コンサート」を企画し、1つ1つの駅を結んでいくように、リレー形式で5つの地域ケアプラザで連続開催をしている。普段地域ケアプラザを利用している人だけでなく、そうでない人の参加を促し、地域の中にある、福祉保健の関わりを底上げしていきたいという思いがある。多くの人の参加があり、地域ケアプラザの役割や機能についても周知できたと思っている。（下瀬谷地域ケアプラザ所長）

➡区社協としては、一人ひとりの困りごとに向き合って、解決していけるような地域づくりを目指して、地域の中で解決していくための仕組みをつくっていかうという思いで、身近な地域のつながり・支え合い活動推進事業を始めた。身近な地域のつながり・支え合い活動推進事業に取り組む中で、支援機関の広がりを感じている。

第4期計画に向けて。多様な主体との連携は、横浜市の第4期計画の特徴でもある。企業や社会福祉法人と連携しながら、地域支援に取り組む仲間を幅広く集めて、多様な主体の参加を促せるよう、第4期計画では取り組んでいきたい。（瀬谷区社会福祉協議会事務局長）

◇地域福祉保健計画が地域の中に浸透してきたことで、自分たちの地域を見つめ直し、普段している活動を地域福祉と結びつけて考えてみる良いきっかけとなっていて、素晴らしいと感じている。しかし、実際には、「次は第4期計画が始まる」ということに、地域が負担を感じているのも事実。計画をつくることそのものために、何かを割かないといけないというのは、違うと思う。地域が普段している活動をさらに進めていくために、5年サイクルの地域福祉保健計画をどう受け止めていくべきか、一緒に考えていただきたい。何かを形にしなければいけないとなると、地域の人には「やらねばならない」と感じてしまったり頑張ってしまう。普段から、日常的にずっと続けているような活動こそ大切で、そんな活動の中から、地域の課題を見つめられるきっかけになるような計画になればいいと思っている。

◇第1期計画から地域福祉保健計画に携わっているが、第1期計画の頃は、あまりよく分からないまま取り組んでいたように思うが、2期、3期と進むにつれて内容も充実してきたと感じている。計画をつくり、目標を定めることで、その目標に向かって、もともとあった活動にも新たな意味合いを持たせるようになった。例えば、地域の運動会では「ただみんなが集まって、楽しく運動しましょう」といったことから、より多くの人に参加してもらうためにどうしたら良いかを考え、あらゆる世代の人が触れ合える機会として世代間の交流が図られるような工夫をしてきた。一つひとつの活動の意味を考えながら取り組むことで、活動が少しずつ豊かになってきたように思っている。

確かに、第4期計画を考えていかないといけないことに、プレッシャーや負担感はある。ただ、ガラッと新しいものにしていくというよりも、その時々求められることを盛り込んでいけばよいと思う。今、いきいき瀬谷っ子事業に瀬谷区役所とともに取り組んでいるが、まさにこういった事業は大切だと思っているので、新しいことも取り込みながら、考えていきたい。

➡第4期計画は、各地区の負担も考慮しながら、連続性を大事につくっていききたいと思っている。これまで以上にいろいろな人に地域福祉保健計画に関わっていただくなど、策定のプロセスを大切にして、地域の役に立てるように、第4期計画策定を進めていきたいと思っている。(福祉保健課長)
◇計画が新しくなるたびに、新しい試みをしなければいけないという思いが、地域に負担を感じさせているのではないかと気になっていた。

みんなで話し合った結果、しなければいけないこと、したほうがいいことはみんなです。負担が増えるのではなくて、みんながごく自然な振る舞いとしてできるようになることで、市民文化の一部となっていくのだと思う。

◇南瀬谷では、これまでの子ども会がなくなっていったところに、新しく大きな子ども会ができた。今まであったものがなくなってしまっているという状態から、また新たに、みんなで子どもに目を向けていこうと、新たな子ども会ができたことは素晴らしいと思う。こうした動きは突然出てきたように一見見えるが、そうではない。子どもに対する思いが、時間をかけて地域に浸透してきた結果である。

普段している活動を文字にしていくというのは責任が生じ、大変なことではあると思う。しかし、今地域がしていることをみんなで確認し合っ、文字にしていくということは大切なことだと思う。
◇取組を再開するということは、少なからず負担があったと思う。しかし、子どものことを思いながら、子ども会を続けていけば、やがて年中行事のひとつとなっていく。このようにして、ある取組は生活の一部になっていくのであり、このことはとても大切なことだと思う。

◇平成30年度に、保健活動推進員70周年記念のイベントとして、一般の参加を募り、ウォーキングイベントを開催した。令和元年度は、区制50周年ということで、保健活動推進員のみでのウォーキングを計画している。

➡PDCAシートの福祉保健課健康づくり係の◎について。平成30年度に開催したウォーキングイベントは、初めての試みだった。初となる大規模なイベントの実施にあたって、保健活動推進員は、いろいろ研修を受け、様々な準備をし、当日は大盛況だった。

保健活動推進員の任期は2年間で、令和元年度は改選の年にあたる。地区ごとの活動を展開するにあたり、皆さんにも引き続きご支援、ご協力をお願いしたい。(福祉保健課長)

◇各地区で、バレーボール大会やソフトボール大会など毎年やってきているが、選手の高齢化に伴って、チーム数が減ってきた。いかに若い人たちを取り込んでいくかが課題だと思っている。また、球技大会以外にも、高齢者や子どもなど、誰でもできる軽スポーツの普及に努めている。特に瀬谷区は、カラーリングが盛ん。用具も揃っているのも、さらに積極的に活用していきたい。ほかにも、ラダーゲッターやボッチャなどもあるので、こうした軽スポーツが普及できるよう、各地区で研修会もしている。

平成30年度には、子どもたちにプロスポーツ選手と接する機会を提供した。たとえば、横浜F・マリノスからコーチを呼び、サッカー教室を開くなどしている。こうした取組は、区全体の規模で

はやっているが、地区ごとの取組にはバラつきがあると感じているので、地区同士、情報交換ができればいいと思う。スポーツ推進委員としても、研修会等をしてしながら、健康増進事業を盛り上げていきたい。会場の問題もある。今後も、学校等に協力をお願いしたい。

◇災害時のペットの問題について。地域防災訓練をしたときに、地域の人からペットの問題にどう対応していけばいいのかという質問があった。ペット同行シミュレーション訓練を実施したとあるが、どうだったのか。また、ほかの地域防災拠点ではどのような話が出ていて、どういう取り決めを考えているのか、情報提供があればと思う。

➡地域防災拠点の訓練では、これまで様々なテーマを取り扱ってきた。その一環として、ペットの問題や要援護者への対応方法などを取り上げ、総合的な視点で訓練に取り組んでいるので、総務課作成のPDCAシートには◎がついている。ただ、ペットの問題のみに注目してみると、まだ不十分に感じている部分もあり、必ずしも予定どおりに取組が進んでいるとは言い難い。第4期計画に向けて、ペットの問題については、検討しなおす必要があると思っている。(生活衛生課長)

➡ほかの地域防災拠点との取組の共有については、地域防災拠点運営委員会連絡会議の場で行っている。この連絡会議は、1年間の取組を振り返りつつ、今後の取組方針を地域や学校と共有し、意見をいただいた上で進めていきたいという意図があって開催している。簡単ではあるが、それぞれの地域防災拠点の取組紹介もしている。しかし、より広く共有ができたり、お互いの良い取組を取り入れたりできるよう、情報提供の仕方に工夫が必要だと思っている。今後も行政と地域、学校とが話し合いながら、よりよい形で地域防災拠点の運営をしていければと思っている。

◇医師会では、区の担当者と一緒に、災害時医療マニュアルを作成しているところ。区と医師会の検討会をすでに何回かやっていて、令和元年度中には完成できる予定。また、医療従事者向けに、ロールプレイ研修を年に一度している。災害時の動きを実際に練習する研修で、毎年ステップアップしていっているように感じている。医師会としては、実際に何かあったときに、区の災害時医療に役立てるよう、引き続き、区と連携しながら、災害等医療に取り組んでいきたい。

◇災害時のペットの問題について。どの地域防災拠点の委員も、地域の人たちが大切に飼っているペットを連れて、できることなら一緒に避難できれば、と思っていると思う。しかし、地域防災拠点の現状を鑑みると、ペットの受け入れは難しいと感じる人が実際には多いのだと思う。理由としては、まず、学校側がペット受け入れに難色を示すことが多い。アレルギーの子どもも学校にはいるので、その子のことを考えると、心配に思う気持ちは理解できる。そんな学校側の事情にも配慮しつつ、たとえば、ブルーシートを敷いてペットの入ってきていいゾーンを設け、終わったあとに消毒するなど、やり方を工夫していかないといけない。また、地域防災拠点には、雨風をしのぎながら、ペットを飼育できるようなスペースはなかなか見つからないと思う。ゲージを置く場所一つとっても、具体的なイメージがなく、生き物であり、飼い主が大切に思っているペットを預かることのできる状況ではない。具体的な備えができて初めて、ペットの受け入れができるのだと思う。

災害時医療マニュアルについて。マニュアルが整備されても、地域としては、そのマニュアルが実際にはどう運用されるのか、なかなか見えてこないのが現状だと思う。モデルとなる地区や地域防災拠点を設定して、実際に医療チームがきて、一緒に訓練する必要があると思っている。たとえば、地域が秋に開催している防災訓練と一緒に参加してもらうなどすることで、新たな課題も見えてくると思う。地域防災拠点に来た人が、医療機関に受診したほうがいいときに、移動手段はどう

するか、地域防災拠点で使える自動車はあるのかといった、具体的な想定訓練を進めていかないといけない。

◇災害時のペットの問題は、どの地区でも課題となっている。ペットの問題を考えるとき、しつけができていかどうかの問題も大きい。三ツ境の防災訓練では、犬を連れてきた想定で訓練をしたが、しつけのされた利口な犬を連れてきていた。しかし、実際には、こんな利口な犬ばかりではないだろう。まずは、飼い主に対して、「自分が飼っているペットは、自分で責任もってしつけてもらう」ということを認識してもらわないといけない。心から、そのペットを大切に思っているのなら、何かあったときに地域防災拠点任せにしないで、ペットが安心して過ごせるように、飼い主自身に責任をもってもらわなければならない。

◇PDCA シートの 14 ページに「屋外用防災スピーカーを」と書いてあるが、区内にはいくつあるのか。また、設置場所はどこなのか教えてほしい。

➡屋外用防災スピーカーは、境川流域 4 機設置してある。地域から要望があって、平成 30 年度に設置し、令和元年度 4 月から稼働している。水害などがあった場合に、避難放送をすることを目的としている。

◇7 ページの「顔が見える関係づくりから始める地域の見守り防災事業」に△がついていることが気になった。日頃の見守りと、いざ災害が発生したときにどうすればいいのか、ということの両方を結びつけながら考えていかないといけないが、地域でもなかなか進んでいないのが現状。地域福祉保健計画ができて、地域と区役所、地域ケアプラザ、瀬谷区社会福祉協議会がとても身近になって、これから解決していけるのではないかと期待しているところ。南瀬谷では、「顔が見える関係づくりから始める地域の見守り」に載っている事例を参考にしながら取組を進めている。身近な事例を掘り起こしつつ、取組をしていくことが大切だと思う。

◇△については、第 4 期計画に向けて、ある意味で楽しみな課題が残っているということだと思う。第 4 期計画策定に向けて、実際のところ、生活そのものに節目があるわけではないかもしれないが、自分たちの生活を定期的に見直すことのできるいい機会として受け止めてもらえたら、と思う。

(2) 第 4 期 横浜市地域福祉保健計画の策定について

(3) 第 4 期 瀬谷区地域福祉保健計画策定の進め方について

➡ 福祉保健課長より説明。

◇まず、市の第 4 期計画の一つ目の特徴として、「身近な地域での活動を支援しよう」ということが打ち出されている。「身近な地域での活動」とはつまり、単位自治会にも裾野を広げていこうということ。瀬谷区でも、第 1 期計画のときから、サロン活動などに熱心に取り組んできているように思う。地域福祉を推進することで、単位自治会もさらに活発になっていく、ということはある。このように連動する動きを自覚的に追求し、地域の力を高めようと計画に打ち出したことに意義があると思う。

二つ目の特徴として、多様な主体との連携が盛り込まれ、特に、企業・学校との連携に注目している。学校との連携に関しては、これまでの学校・地域コーディネーターの仕組みを、制度的にさらに充実させていこうという国の動きがある。こうした動きも含めて、地域と学校の関係が、さら

に発展していくことを期待している。また、社会福祉法人による地域貢献も求められていて、法人側の関心も高くなっている。

4. その他

令和元年度 瀬谷区地域福祉保健計画 会議予定について

➡事業企画担当係長より説明。